
月光蝶の恋歌

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光蝶の恋歌

【Nコード】

N3778C

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

恋をしても実らず心を痛める少女。果たしてその思いは報われるのか？

く序章く

悲しみなんて無ければ良いのに・・・

涙を流しながら少女は何度もそう呟いた。

誰も傷つきたくなかった。もちろん失いたくもなかった。ただ私は失った。

この気持ちは届かずに、もしかしたら彼を傷つけてしまったかもしれない。

さようなら・・・

その声さえもう届かない。

結局、少女は気付かなかった。

一番傷ついたのは自分自身であるということ。

そのままひたすらに、ただ、ただ涙を流し続けた。

誰も好きにならなければ誰も傷つかずに済むのかもしれない

それが少女の辿り着いた結論だった。

泣きはらして真っ赤になった目で、雨上がりの青空を見上げた。

希望という光は・・・永遠に見えない気がした。

く 第一話 芽生え く

日常がつまらなかった。楽しみなんて何一つ無かった。高校に入って、クラスに馴染めないまま2ヶ月が過ぎていた。友達と話していても、何処となく遠慮してしまう。

そんな私の密やかな楽しみは部活だった。周りを気にせずスポーツに打ち込める。

ここでは、ちゃんと友達と呼べる友達もいたし楽しかった。ただ、周りは女子ばかりなだけに、いつも話題は恋の話。

私は正直それが苦手だった。

誰が誰を好きであろうと無かろうと、私には関係なかったし、話に交ざれるほどの話題も持っていなかった。

「中学の頃とか彼氏いたの？」

そんなもの、私にはいなかったし、いたとしても貴女には関係ないでしょ？

心の中でそう呟きながら皆の話を聞き流していた。

話題に交ざれなくても寂しくは無かった。私に共感してくれる友達が隣にいてくれたからだ。

私達は、憧れという感情をもっても、それ以上の感情になることはなかった。

恋心ほど移ろいやすい感情はないことをちゃんと分かっていたから。それに、片思いなんて・・・もう二度としたくなかったし。

憧れという感情だけで、十分だった。

ある日、親友が部活を辞めてしまった。
思えばあの時、私の中で何かが変わってしまったのかもしれない・
・。

いつの間にか、私の隣にはポツカリと穴が開いたように誰もいなくなっていた。
それをきっかけに、私は急に寂しいという感情に襲われるようになった。

気がつけば「仲間」から孤立していた。

無理に仲間をつくろうとすることはない

そう思うのは私の意地だったのだろうか？

何故か胸が痛かった。

笑っていても笑っていない。偽っていないのに偽っている。

真実なのに嘘。現実なのに虚無。

曖昧かつ、複雑な気持ちな気持ちの中を漂い続け

意地を張る一方では、心の中に寂しさが募っていった。

かに頼りたくて、誰かに寄り掛かっていたくて・・・

誰

でも、出来なくて。

憧れだった。そう、ただの憧れだったの。

優しい笑顔の貴方が、憧れで。

そう、ただの憧れで。違うの、憧れだけよ？

憧れで、憧れで、憧れで・・・・・・好きで。

憧れが恋心になってしまったのは何故？

く第二話 恋心と…く

貴方のことが好きだと気付いたその日から、
少しだけ、毎日が明るくなった。

私は私だけの幸せを見つけたのだから、それだけで満たされていた。
私は気付いていなかったけれど、

それは周りから見ても一目瞭然の変化だったらしい。
当たり前なのかもしれない。

だって、少しでも綺麗に見えるように努力するのは自然なことだと思っから。

「変わったね。」

そうね。と、心の中で呟く。決して口には出さない。

言えば噂になるから。こういった話題に女子は敏感なのだ。

ほら、やっぱり噂になった。私は何も言っていないのに。

その後、ある友達が私の元に持ってきたのは彼のメールアドレスだった。

彼とメールを始めて4ヶ月が過ぎた。
毎日が本当に楽しかった。

でも

私の心は裂かれる思いだった。

彼が私のことをどう思っているかが分からないから。
複雑な思いが渦を巻く。

不安で、不安で、心の痛みは増すばかり。
けど、確かめたくて・・・

私は彼に思いを告げてしまった。

答えは“NO”

「ごめん」の一言もなしに。

楽しい時間には、いずれ終わりが来る事など分かっていたはずなのに。
なのに、

愚かな私・・・

そのピリオドを自分で打ってしまったわ。

笑いたいのか、泣きたいのか分からない。

自分を嘲り、後悔し。

暗い心のままの、1ヶ月。

〈第1話 月光蝶〉

あれから何ヶ月が過ぎたのだろうか。

私には分からない。

否、分かる必要もない。

あの時の誓いは、脆くも崩れ散ろうとしていた。

止められない、制御できない自分の気持ちは、日に日に強さを増していく。

その気持ちを必死に押さえつけ、平然を装う。

自分自身でも一番気づきたくない感情。

もう二度と持たないと誓ったあの感情が、私の中で芽生えている。認めたくない。認めたくない。認めたくない。

捨てたはずなのに！！

自己嫌悪に陥る。

だって、そうでしょ？

私を持つてはいけない感情は他でもなくソレなのよ？

また種を蒔くつもり？

はっ、馬鹿じゃないの？

もう一人のワタシは私を笑う。

それでも、止められなかった

どうしていいか分からない。

今まで、自分を偽りすぎたから。

また、楽しい時間にピリオドを打つつもりなの？

嗚呼・・・　これを“呪い”と言わずして何と言おうか？

貴方に“嫌い”と言われるのが怖かった。
現実を突き付けられるのが恐ろしかった。

自分が傷つくのが怖かった

私が傷つく？私は何を言っているのだろうか。
いつ私が傷ついたというの？だったらあの時のあの人のほうが・・・

じゃあ、あの人はいつ傷ついたと言ったの？

私が苦しみ、涙したのは事実であっても、

あの人が、どう感じたかは私の勝手な予想でしかない。

結局、私は最初から現実など見つめていなかったのだ。
言い訳をし、偽り続けた私の気持ち。

本当に傷ついたのは私から見れば私だったということ。
臆病な私は気付かないフリをしていただけなのだ。

そして私は気が付いた。

何よりも愚かなのは自分を殺し、偽ることであり、
大切なのは過去より今であるということに。

私の行動は私の責任。

なら、何を恐れることがあるのか？

真実を告げること何の罪があるのか？

そうして私は一歩踏み出す。

貴方に“好き”と伝えるために。

第2話 Blue sky

私が貴方に好きだと伝えた時に貴方はどんな顔をしたのだろうか？
私には分からない。

貴方の顔を見られるほどの勇氣は持ち合わせていなかったから。

どうして私はこんなにも臆病なのだろう。

決意して踏み出した一步のはずなのに、答えを聞くのを恐れてる。
自分の気持ちを伝えるのが精一杯で、

答えを聞く前から泣きそうで、
きつとヒドイ顔をしていたに違いない。

ドクン、ドクンと心臓が早くなり、呼吸さえ苦しい。

嗚呼、色々な事を経験してきたけど、この瞬間だけは慣れないな。

答えを聞きたい、だけど聞きたくない気もする。とても複雑な心境。
顔が火照り、赤くなるのが自分でも分かる。

さあ、どっちなの？

答えは・・・“Yes”

信じられなかった。

本当に、私なんかで良いのかと疑った。

こんな私で良いのかと。

だけど、嬉しかった。

嬉しくて、嬉しくて、涙が出た。

それは私にとって初めての体験。「OK」だなんて…。

もし、私があの人に、本当に自分の恋心を切り捨ててしまっていたならば

こんな幸せは掴めなかったのかもしれない。

貴方は気づいて無いかもしれないけど、

貴方は私にもう一度、喜びを教えてください。
人を愛する喜びを。

だからね、もう一つだけ貴方に伝えたいことがあるの。

ありがとう。

END

〈第2話 Blue sky〉（後書き）

〈小説あとがき〉

いかがでしたか？この作品は私にとって初めての恋愛小説です。まあ、小説というより半ば詩の様になってますが（苦笑）

読んでくださった人、有難うございました。これからも宜しくお願ひします。

評価の方も受け付けております。では、また次の作品で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778c/>

月光蝶の恋歌

2010年10月19日20時09分発行